

1-6		主題	園芸療法の個別実践報告	
認知症		副題	園芸療法を通じて入居者の機能改善が見られた事例	
機能訓練				
研究期間	12ヶ月	事業所	介護老人福祉施設 かみさぎホーム	
発表者：藤本 和夫（ふじもとかずお）			アドバイザー：	
共同研究者：				
電話	03-3926-8443	メール	info@m-kamisagi.jp	
FAX	03-3970-9620	URL	http://www.m-kamisagi.jp	

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人武蔵野療園を母体とし、昭和63年に開設。入居100名、併設ショートステイ16名で運営している。通所介護（一般型、地域密着型認知症対応型）、居宅介護支援、訪問介護、地域包括支援センター（受託運営）を併設している。
------------------	---

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>平成16年頃より、趣味・余暇活動の一つで「畑の時間」として園芸活動を行っていた。</p> <p>数年間の活動の中において、比較的介護度が軽度の方に対して、お楽しみとしての趣味・余暇活動の効果が色濃く見られた。一方、認知症の有する入居者に対しても良い影響を与えている側面もあった。</p> <p>そこで、認知症を有する入居者への個別ケアとリハビリの一環として、園芸療法を実践している講師を招き、「園芸療法」へ展開することとした。</p>

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>園芸療法は1970年代にアメリカで発達し、1990年代に日本でも用語が使われるようになった。園芸療法は「園芸を手段として心身の状態を改善すること」と定義されている。</p> <p>かみさぎホームでは、認知症ケアの手法として「馴染みの活動」を実践している。個々の生活歴において、園芸や土いじりに馴染みのある方や園芸に関心の強い方を対象に実施することとした。認知症による周辺症状や日常生活動作へのリハビリ効果に期待し、平成21年9月より園芸療法を開始した。</p>

《具体的な取り組みの内容》

プログラムは、平成21年9月から22年9月までに、延べ24回実施した。実施場所はリハビリ室及びリハビリ室前庭において、午前10時30分から1時間行なった。

1回あたりの入居者は4名（平成22年4月より2名追加）。援助スタッフは園芸療法講師1名、施設職員1名、ボランティア複数名（毎回変動あり）で構成されている。ボランティアはパートナーとして、参加者の作業援助を行う。条件が許す限り毎回同じメンバーがマンツーマン対応で実施した。

展開過程は5期に分けて実施した。第1期は平成21年9月から11月、第2期は12月から平成22年2月、第3期は3月から5月、第4期は6月から8月、第5期は9月とした。

今回は初回より継続参加している入居者1名の事例を取り上げる。

発表資料には顔写真も掲載されているが、掲載に関して個別に了承を得ており、他情報との組み合わせ等により個人が特定できないよう配慮している。

《取り組みの結果と評価》

開始当初、積極的でなかった参加者が、一年間の園芸療法で何かの世話をしたり、作物を育てる等の作業を通して、表情が豊かになる、自身からの発語が増える、感情をあらわに表現する等、生活意欲のアップ、社会参加の意識の芽生えがみられた。また、身体機能面でも座位保持時間の延長等、機能維持に効果を認めた。

《まとめ》

園芸療法は、認知症の方への療法として、身体機能・精神機能の維持向上に対し、一定の成果を得ることができた。個々の条件に応じて、作業環境・道具の工夫、サポート体制への配慮等が必要となってくるが、特に精神機能面に対してはパートナーを固定し、よりコミュニケーションが図れるようにする＝「馴染みの関係づくり」でのフォローは有効であった。

今後は、園芸療法で得た効果がますます生活の中で活かせるようなアプローチを続けていくことが求められる。

《参考文献》

田崎史江：園芸療法（バイオメカニズム会誌、Vol.30 No.2 2006）

《提案と発信》

【メモ欄】